

西谷15・16号墳について

花谷 浩

1.はじめに

西谷墳墓群（島根県出雲市大津町）は、出雲平野の南辺、斐伊川左岸（西岸）の丘陵上に広がる遺跡である。6基の四隅突出型墳丘墓を含む弥生墳丘墓および古墳，合計27基と石棺墓3基・土坑墓2基から構成される¹。また，同じ丘陵斜面には3群20基ほどの横穴墓も確認されている。弥生時代後期（2世紀後半）から古墳時代終末期（7世紀前半）にまでおよぶ多数の墳墓が密集する遺跡地である（図1）。

西谷墳墓群の弥生墳丘墓と古墳は，四隅突出型墳丘墓の1～4・6号墓が並ぶ西側丘陵，最大規模の9号墓がある北側丘陵，7号墳など10基の古墳が点在する中央丘陵，12号墳など6基がある南側丘陵，の大きくは4地区に分かれている。

15号墳と16号墳はともに中央丘陵の東南部に位置していた（図1）。西谷15号墳と16号墳は，農道建設にともなう事前調査として1991年と92年に発掘調査され，報告書も刊行されている（湯村ほか1993）。これによると，15号墳は一辺約15m・高さ約0.9mの方墳で，墳丘上に東西2.6m×南北0.7m×深さ0.4mの長方形土坑を確認した。木棺直葬かと推定されている。この土坑の上面および墳丘東西の溝から，鉄刀子1点，須恵器杯蓋1点，土師器数点が出土した。葺石および埴輪はない。

16号墳は，直径11m・高さ0.5～1mの円墳で，東西方向に箱形石棺が設置されていた。石棺の蓋石は破壊され，石棺内部も攪乱を受けていたが，石棺外の南側，側石に接したところから鉄器4点が出土した。土器や埴輪は出土しなかった。報告者は「5世紀後半から6世紀初頭のものの」と推定した。

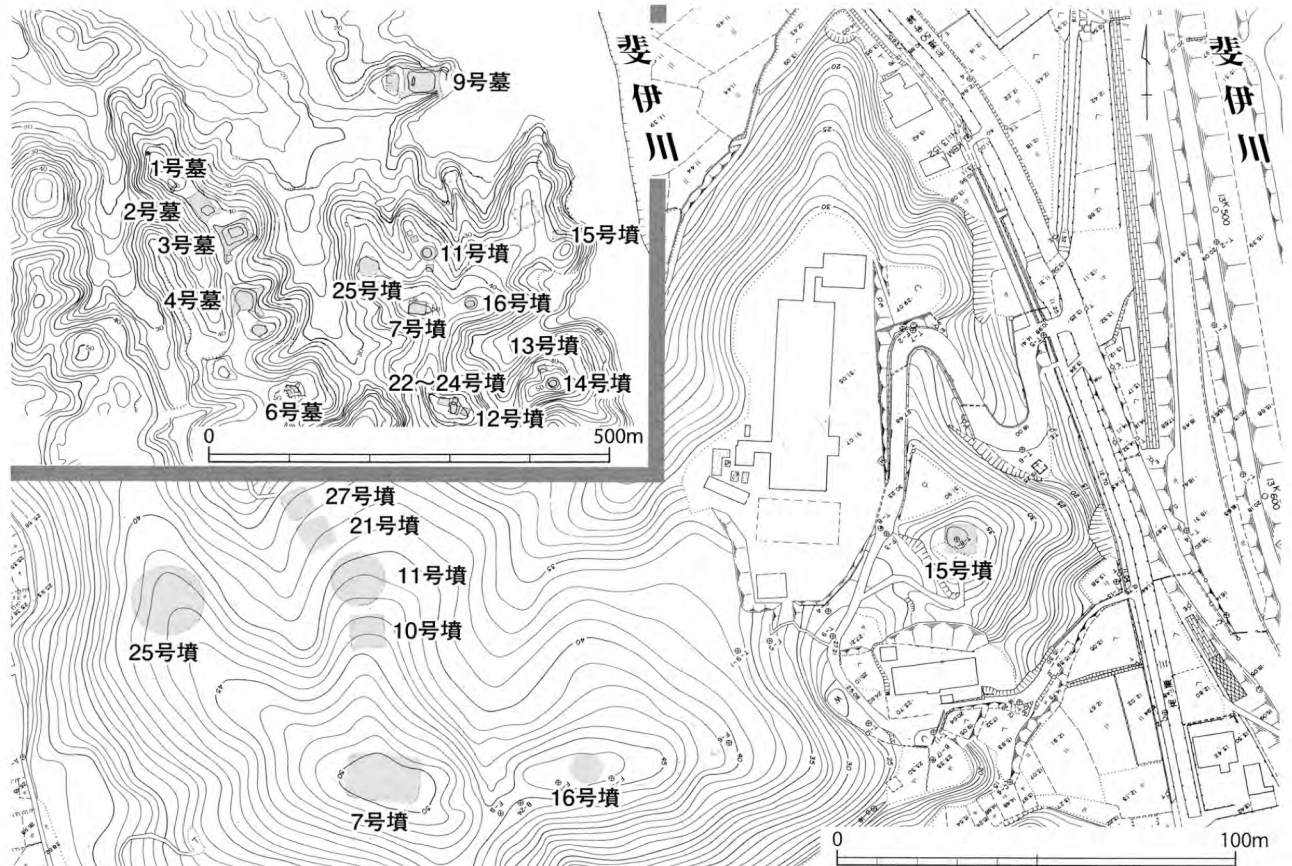


図1 西谷墳墓群と15・16号墳の位置（上：1/10,000，下：1/2,000）

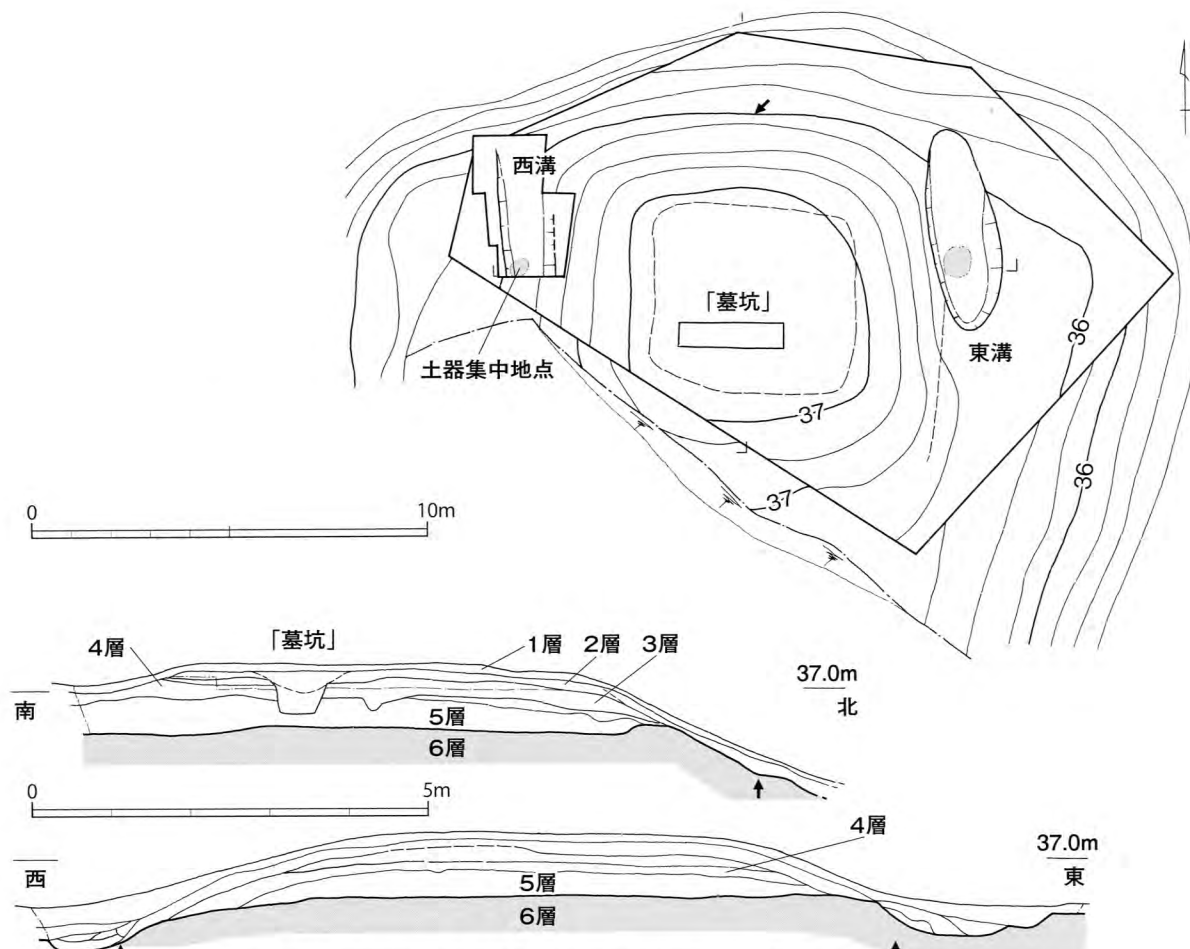


図2 西谷15号墳墳丘測量図(1/200)と土層断面図(1/100)

この16号墳については、その後、遺跡全体の範囲および内容確認調査のちに刊行された報告書(坂本ほか2006)では、出土した鉄製土掘り具(タビ)の類例などから「古墳時代前期末～中期前葉頃」と考えた(坂本ほか2006, 153頁)。当初の報告よりは約100年も古い年代であり、西谷墳墓群の形成過程を復元するにあたっては、看過しがたい年代差である。

西谷15号墳と16号墳は、西谷墳墓群では全面的な発掘がおこなわれた数少ない古墳である。この2基の古墳を改めて検討してみたいと思う。

2. 西谷15号墳

墳形と規模(図2) 15号墳は調査前の測量図(報告書第4図)でも方墳と判断できる。その規模を報告書は「一辺約15mの方墳の形状を比較的良好に残していた。高さは0.9mを測る。」とするが、その根拠は示されていない。

調査では墳丘の東西に南北溝が見つかった。西側の南北溝(以下「西溝」)について報告書本文では「幅1.2m」だが、調査後の墳丘平面図で計ると0.9m、溝内の土器出土状況図では1.25m。溝幅が図面によって各々違う。

これは東側の南北溝(以下「東溝」)も同様で、本文では「幅0.8m」、墳丘平面図では最大「1.5m」、土器出土状況図では「0.85m」である。本文の記述はともに土器出土状況図の数値に近い。ただし、溝幅をもっとも正確に表現したのは墳丘東西断面図と思われる。これによると西溝は幅1.15m(+α)、東溝は1.7mである。溝幅が平面図に正確に表現されていないとなると、墳丘平面図から規模を計測するのはやや不安だ。

そこで、再び墳丘を東西方向に掘り抜いた東西断面図を見る(図2下段)。この図によると、西溝と東溝の距離(溝底から墳丘への立ち上がり(▲)相互の距離)は、10.2mである。これを15号墳の東西規模とみなすのが妥当である。

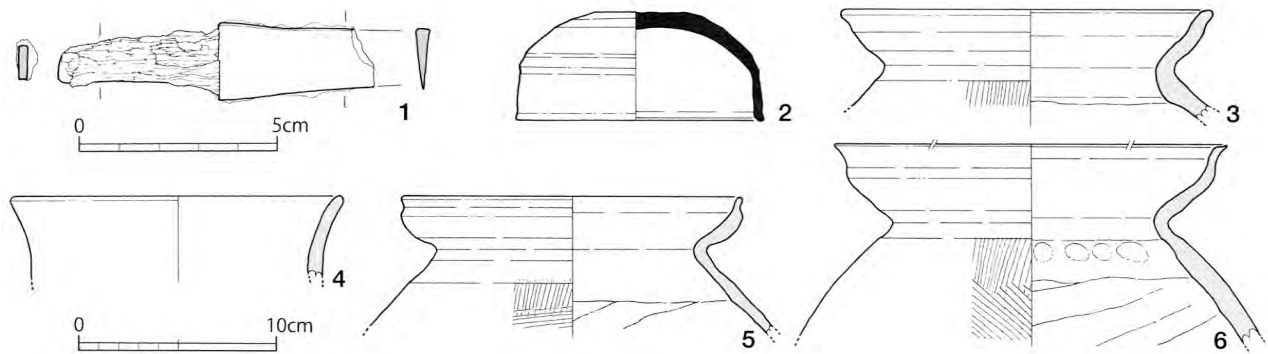


図3 西谷15号墳出土遺物実測図（刀子：1/2，土器：1/4）

墳丘西南部は壊されていたので、南の墳裾は不明。北側については南北の土層断面によれば、「墓坑」から北へ5.8mのところの地山の傾斜変換点がある。報告書では「北側は墳丘が流出している可能性があり」としているが、この北側の傾斜変換点（図2（↑））の標高35.85mは、東溝の溝底の35.98m、西溝の35.78mと整合的である。この変換点を北側の墳裾とみてもよいのではないか。「墓坑」との距離（5.8m）を2倍し、南北規模「11.6m」という数値を得る。

また、頂部の調査時の標高は37.36m、表土を除くと37.28m（土層断面図による）だから、墳丘の高さは1.3～1.5mである。

以上、15号墳の規模は、東西10.2m×南北不明（11.6mか？）×高さ1.3～1.5mである²。

墳丘構築の方法 報告書ではいわゆる地山（第6層）を平らに削平したのち第5層（明褐色粘質土層）から第3層（赤褐色粘質土層）を積み上げ、さらに第2層（黄褐色粘質土層）でおおって完成させた、としている。「墓坑」は第3層上面からの掘りこみである。

第4層（暗褐色粘質土層）については、報告書でも古墳築造当時の「旧表土」の可能性にふれられているが、「その可能性は薄いと思われる」とある。しかし、写真を見ると、この第4層は基本的にその下層の第5層と不整合であり、盛土を重ねたようには見えない。報告書では「地山の直上に第4層が確認されるところもあること」を「旧表土」とみなさない根拠としている。それは墳丘中心から西側の土層断面で、それ以外では第4層が第5層の上にほぼ水平堆積している³。「旧表土」の可能性を考えたい。

出土遺物（図3） 鉄器と土器がある⁴。

1は鉄刀子。両関で、関部の刃幅は2.1cm。茎は長さ4cmあり、柄の木質が残っている。刃部には欠損がある。刃部に木質の付着は認められない。現存全長8cm。「墓坑」出土。

2は須恵器杯蓋。天井部が丸く高い。体部と天井部の境の稜線は鋭くない。口縁端面には浅い凹線がある。天井部の半分ほどの範囲にヘラケズリがあるが、中央にはケズリがおよばず、ヘラ切りの痕跡がある。口径13.0cm・高さ5.8cm。西溝出土。

3は土師器甕。口縁部はゆるく屈曲して広がる。胴部の調整は外面タテハケ、内面ヘラケズリ。口径18.8cm。「墓坑」出土。

4は土師器直口壺または甕。口縁部外面にタテハケがあるようだが摩滅のため不詳。口径16.8cm。西溝出土。

5は土師器甕。口縁は内湾し端部が屈曲する。胴部の調整は外面がタテハケ後にヨコハケ、内面がヘラケズリ。口径17.3cm。西溝出土。

6も土師器甕。口縁端部がやや長く延びて、端部に面がある。胴部の調整は外面タテハケ後にナナメハケ、内面ヘラケズリ。口径不明だが、20cm前後だろう。東溝出土。

このほか、東西の溝から赤彩のある土師器高杯が出土しているが、図化できなかった。

小 結 西谷15号墳は、東西10.2m×南北不明（11.6mか？）、高さ1.3～1.5mの方墳である。木棺を直葬していたと推定される。この墳丘規模は、西谷墳墓群の南側丘陵にある13号墳や14号墳など（いずれも一辺10m）と近似し、西谷墳墓群ではもっとも小さい古墳である。

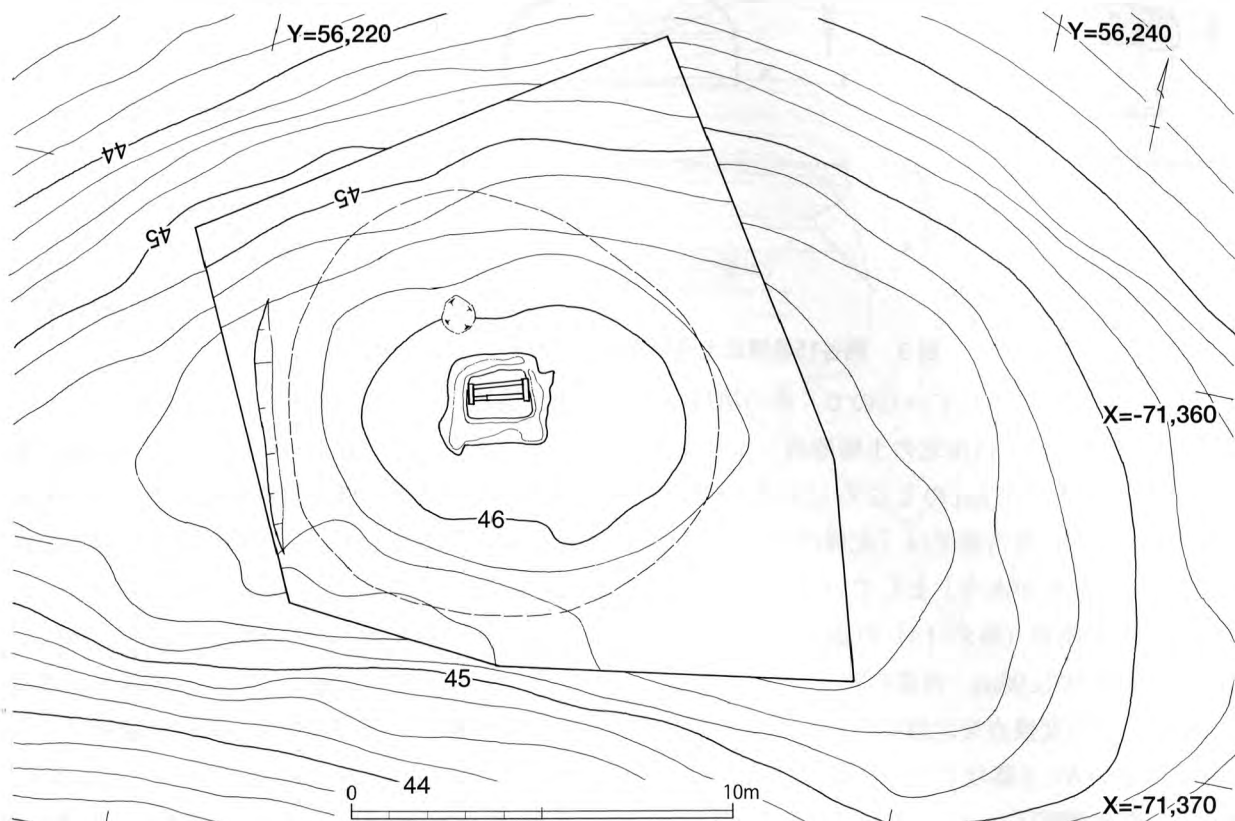


図4 西谷16号墳墳丘測量図 (1/200)

3. 西谷16号墳

既報告のように、直径11m・高さ0.5～1mの円墳(図4)。墳丘に葺石や埴輪などはない。箱形石棺と副葬品について述べる。

箱形石棺(図5) 凝灰岩と思われる石材を板状に切削加工した「切石」を組み合わせた箱形石棺である。外法で長さ(東西)1.65m×幅0.3m×高さ0.3m、内法1.36m×幅0.22～0.31m×深さ0.3mある。東側の方の石棺幅が広く、底面もわずかに高いので頭位は東であろう。小口の石材が長辺の側石を挟み込む構造で、北側の側石は1枚、南側は2枚である。小口の石材の外側には切石や礫を使った控え積みがある。また、副葬品が置かれていた南辺を除く三辺の石材裾は、粘土で固定されていた。底石も礫敷きもない。蓋石はすでに完全に破壊されていたため、形状や枚数は不明。棺内には副葬品も人骨も残されていなかった。

石棺の掘形は、東西2.8m×南北2.3mの規模をもち、四周に浅い溝が掘られている。

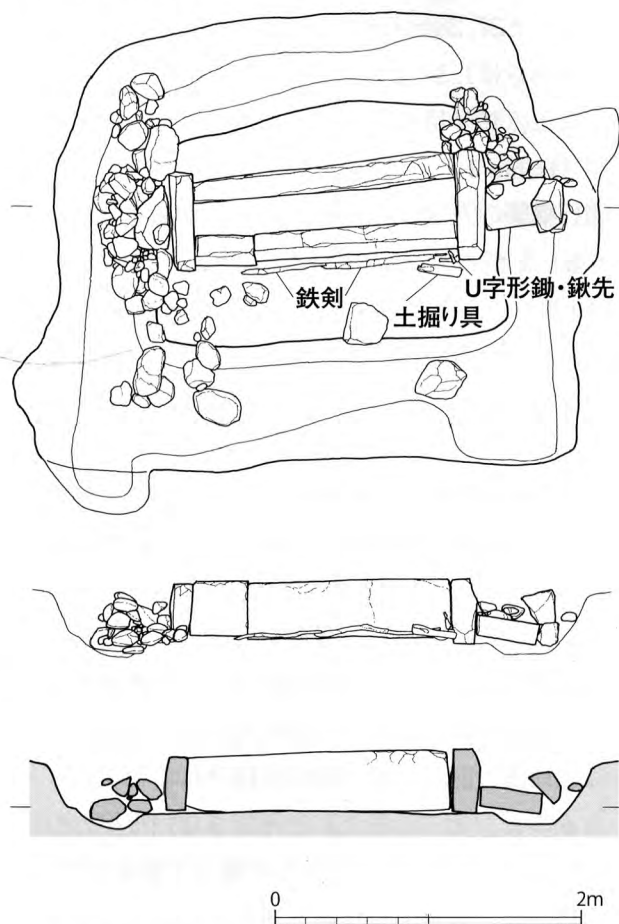


図5 西谷16号墳箱形石棺および遺物出土状況実測図 (1/40)

副葬品 (図6・7) 鉄剣2振り、鉄製U字形鋤・鍬先、鉄製土掘り具がある。鉄剣は短剣と長剣⁵で、ともにS字形に曲げられている。

a. 短剣 (図6-1) 差渡し長43.0cm (復元全長43.8cm)、復元刃部長35.8cm、刃幅2.4cm、刃部厚0.5~0.3cmの細身の剣である。先端から約11cmと約24cmあたりの二ヶ所で折り曲げられている。刃部・茎とも木質は残らない。

茎は長さ8cm、幅1.5cm、厚さ0.25cmである。茎の両側辺は直線的でなく、一方はゆるやかに内反りして他方は外反りする。そして、外反りする側の関が反対側のそれより若干深い。茎の尻近くには目釘孔がある。目釘は木釘であろうか。現重量127.6g (保存処理後)。

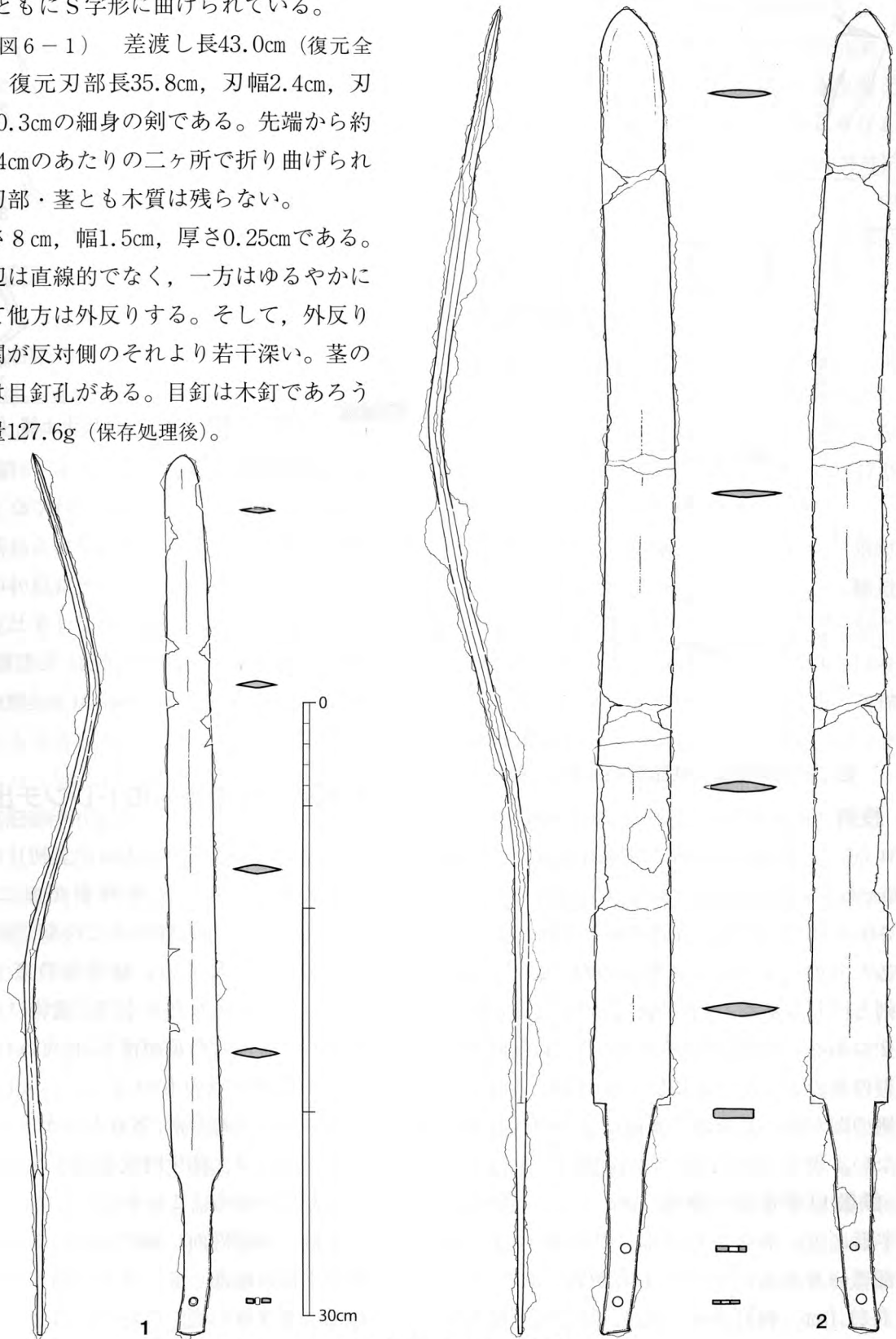


図6 16号墳出土鉄器実測図1 (1/3)

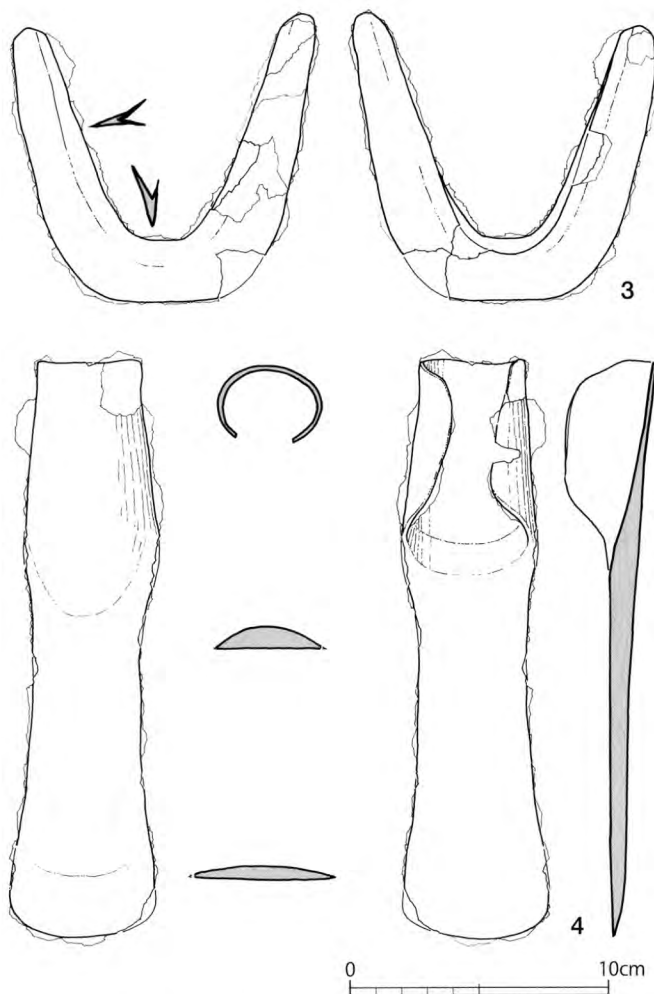


図7 16号墳出土鉄器実測図2 (1/3)

b. 長剣 (図6-2) 差渡し長63.0cm (復元全長64.0cm), 刃部長52.9cm, 刃幅3.6cm, 刃部厚0.6cmある。茎は長さ11.1cm, 幅は2.4~1.4cm, 厚さ0.4~0.2cmある。先端から約20cmと約40cmのあたりの二ヶ所が折り曲げられているのは、短剣と同じである。茎の尻に近いほうに目釘孔が2つある。目釘は鉄製ではない。長剣の茎も直刀の茎のごとく一方に反っており、外反りする側の関が深い。なお、表面に木質の残存を認めない。現重量328.3g (保存処理後)。

c. 鉄製U字形鋤・鍬先 (図7-1) 全体にV字形に近い形をしている。中央部 (先端) の袋部は一方が深いので、こちらが表であろうか。全長11.0cm, 幅11.8cm, 現重量87.5g (保存処理後)。

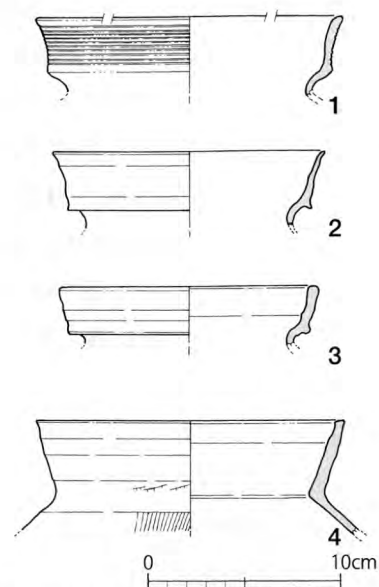


図8 16号墳東方地区出土土器 (1/4)

d. 鉄製土掘り具 (図7-2) 一端に長さ約7cmの袋部を設け、先端部だけでなく刃部の両側面にも刃を付けた鉄製品である。刃部先端部は凸レンズ状の断面だが、それ以外の刃部断面は三日月形である。韓半島で「タビ」とよばれる農工具の一つ。全長22.5cm, 刃部幅5.6cm, 袋部幅5.2cm, 現重量319.8g (保存処理後)。

4. 西谷16号墳東方のトレンチ出土品

西谷16号墳とその周辺は、当初「西谷墳墓群第3地点」として試掘調査がおこなわれた (1991年10月)。報告書ではこれを「第1調査区」 (第3図) と改称した。16号墳の東方に5ヶ所のトレンチを入れたようで、遺物には「西谷3 site 4T」のラベルが付く。日付は1991年10月。これが第3地点のものらしい。「4T」は「第4トレンチ」だろうが、どれなのかはわからない。

この中には、弥生時代後期から古墳時代前期の土器片がある。これを図示しておく (図8)。

1は、口縁外面に擬凹線紋のある複合口縁の甕形土器口縁部。2・3は外面に施紋のない口縁部。4は直口壺。これら以外に、7世紀前半から中頃の須恵器杯身などもある。

5. 西谷15号墳小論

西谷15号墳の須恵器杯蓋は、出雲1期、陶邑高蔵47号窯（TK47）型式相当のものである（大谷1994、田辺1981）。西谷墳墓群でこの時期の須恵器を出土した古墳はほかにない。

出雲平野の遺跡で出雲1期の須恵器を出土する例はそう多くはない。松山智弘や池淵俊一の論考（松山1991、池淵2008）によりつつ、その概要を地域ごとに述べてみよう⁶。

平野北部（旧斐伊川右岸） 山持遺跡（出雲市西林木町）では、Ⅵ区の「土器群1」に須恵器杯蓋（陶邑TK47型式?）、「土器群71」に須恵器蓋杯・無蓋高杯・有蓋高杯（陶邑高蔵208号窯（TK208）型式）がある。共伴した土師器は、前者が松山Ⅳ期新、後者が松山Ⅳ期古。またⅦ区の溝SD01からは須恵器蓋杯・無蓋高杯・はそうが出土した（内田ほか2007）。陶邑高蔵23号窯（TK23）型式から陶器山15号窯（MT15）型式までのものを含む。青木遺跡（出雲市東林木町）の包含層からも須恵器把手付碗・台付碗と陶質土器が出土した（中川ほか2008）。

平野北部（旧斐伊川左岸） 矢野遺跡（出雲市矢野町）の溝SD3042からは、陶邑高蔵73号窯（TK73）須恵器無蓋高杯が出土した。これは出雲平野の出土須恵器としては最古型式である（三吉2010）。松山Ⅲ期の土師器がともなう。ほかにも井戸SE2197の須恵器はそう（TK208型式）や井戸SE2145の須恵器蓋杯（TK23型式）がある（坂本ほか2010）。

矢野遺跡の西方にある井原遺跡（出雲市井原町）では、Ⅰ区の溝SD03やSD05～07などから陶邑TK23～TK47型式の須恵器が出土した（岸ほか2002）。蓋杯・台付碗・有蓋高杯・甕などがある。松山Ⅳ期の土師器がともなう。

このほかには、中野清水遺跡（出雲市中野町）の6区13層10号溝から陶邑TK23型式の須恵器

杯蓋が出土した（久保田ほか2005）。中野清水遺跡では、これよりやや古い土器群（6区5号土器群：松山Ⅳ期古）では、須恵器がともなっていない。また、中野西遺跡（出雲市今市町）でも松山Ⅲ～Ⅳ期の土師器で構成される土器だまり1・2や1区5層などに須恵器はともなわない（坂本2002）。中野美保遺跡（出雲市中野町）でも5世紀に遡る須恵器は出土しておらず、中野遺跡群での須恵器の普及状況は、井原遺跡や矢野遺跡とは違いをみせるようである。

平野南部（斐伊川左岸） 西谷墳墓群がある地域である。菅原Ⅱ遺跡（出雲市船津町）では3区建物2から陶邑TK23型式の杯蓋が出土した（川原ほか2005）。長廻遺跡（出雲市大津町）Ⅳ区加工段5に松山Ⅳ期の土師器と陶邑TK47型式の須恵器蓋杯⁷がある（萩・浅野2003）。

平野南部（神戸川流域） 遺跡によって須恵器の有無が顕著である。平地部の古志本郷遺跡（出雲市古志町）では陶質土器の出土は確認されるが松山Ⅳ期のHⅡ区溝SD50に須恵器はなく（勝部2001）、遺跡全体としてもこの時期の遺構・遺物は希薄である。右岸の天神遺跡（出雲市天神町ほか）や築山遺跡（出雲市上塩冶町）、左岸の田畑遺跡や下古志遺跡（出雲市下古志町）にもこの時期の須恵器が確認されない。

その一方で、神戸川右岸で丘陵地にかかる三田谷Ⅰ遺跡（出雲市上塩冶町）では、方形の竪穴住居跡が多数確認されている。陶邑TK208～TK23型式の須恵器（杯身・無蓋高杯）と松山Ⅳ期古段階の土師器を出土する住居跡SI01・06・17、および陶邑TK23～TK47型式の須恵器（蓋杯・高杯）と松山Ⅳ期新段階の土師器を出土する住居跡SI03・04・08・09などである（今岡・梶田1999）。溝や包含層からも同時期の須恵器が多数出土する（熱田ほか2000・鳥谷2000）。

神戸川左岸の南部丘陵裾に立地する遺跡では、御崎谷遺跡（出雲市東神西町）の土器だまり（今岡2009）や玉泉寺裏遺跡（出雲市東神西

町)に陶器 TK47型式の蓋杯がある(景山・曾田 2008)。このほか、浅柄石棺墓(出雲市知井宮町)から出土した陶器 TK47型式の蓋杯が旧大社考古学会収集資料のなかにある⁸。

その他の地域 出雲平野東部では5世紀に遡る須恵器の発見はまれである。島根半島南麓部、旧平田市域ではこの時期の須恵器は見いだされていないようである。出雲平野東南辺の斐川町域では、大倉Ⅳ遺跡(斐川町学頭)がある(宍道 1992)。1994・95年の発掘調査では竪穴住居跡1棟が見つかった。土師器大型壺・直口壺・高杯と須恵器杯身が出土した(四方田ほか 1997)。土師器は松山Ⅳ期、須恵器は陶器 TK208型式であろう。なお、小丸山古墳(斐川町学頭)ではかつて、直刀・冑と須恵器が出土したという(宍道 1992)。あるいは5世紀に遡る資料なのかもしれない。

そのほか、上長浜貝塚(出雲市西園町)に陶質土器がある。これは4世紀に遡るであろう。ひろげ遺跡(出雲市大社町)は島根半島西端近く大社湾を望む海岸にある。陶器 TK47から MT15型式の須恵器(蓋杯・高杯・はそう)が出土した(杉原・大梶 1997)。神西湖南岸では、中島遺跡(出雲市湖陵町西三部)(杉原ほか 1987)と只谷Ⅲ遺跡(出雲市湖陵町二部姉谷)から5世紀代の須恵器が出土している。いずれも少量である。

まとめ 一定量の須恵器が認められるのは、「出雲大川」河口部の井原遺跡と神戸川右岸南部の三田谷Ⅰ遺跡くらいで、ほかの出土遺跡は蓋杯が出土する程度である。そして、神戸川下流域の遺跡(天神遺跡、築山遺跡、古志本郷遺跡、下古志遺跡、田端遺跡)では、出雲1期の須恵器が出土していない。「出雲大川」左岸の小山遺跡、姫原西遺跡、蔵小路西遺跡、中野美保遺跡、中野西遺跡などでも同様である。意宇平野の夫敷遺跡や国府下層遺跡の韓式系土器と初期須恵器の出土状況と大きな違いを認めうる。

6. 西谷16号墳小論

16号墳の箱形石棺と出土鉄器を検討する。

箱形石棺 山陰地域の箱形石棺については、山本清の研究がある(山本 1964・1971)。山本は「箱状—すなわち四壁や蓋を板状の石の平な面を主として用いて構成した棺というほどの、大まかな特徴を目安」として「箱式棺」を定義し、これを石材および空間(空間の大小と壁面構造)によって大まかに区分した。

石材はⅠ：板状割石

Ⅱ：板状に切削した切石

空間はA：長さ2m内外幅50cm内外ないし

それに準ずるもの

B：幅・高さ1m程度ないしそれ以上
それぞれ2つに分類され、その組み合わせにより4型式が設定された⁹。この山本分類では、16号墳の箱形石棺は「ⅡA」にあたる。「山陰箱式棺表」によれば、同型式として、仲仙寺1・5号墳(安来市荒島町)や中ノ空古墳(松江市鹿島町)、西ノ奥古墳(松江市八束町)などが挙げられ、「中期後半から後期初頭ごろ」の年代が推定されている¹⁰。

箱形石棺の属性は、山本が掲げた2要素以外にもある¹¹。石材の組み方(小口石を側石の間に入れるか外に置くか)、蓋石の構成、底石の有無、石棺に対する掘形の大きさ、墳丘でのあり方(中心埋葬か周辺部のものか)などが想起されるが、今回はこれらの要素を考慮しつつ16号墳と類似する諸例を分析の対象としてみたい。

西谷16号墳の箱形石棺は、①切石を組み合わせる、②小口石が側石を挟む(仮に「Ⅱ形」とする)、③掘形が大きい、といった特徴がある。

まず、①切石を組み合わせる、という特徴。山本の集成表でも、東は安来平野から出雲平野北部にいたる中海・宍道湖沿岸部に広く分布することがわかる。出雲平野部では北部の平田船川

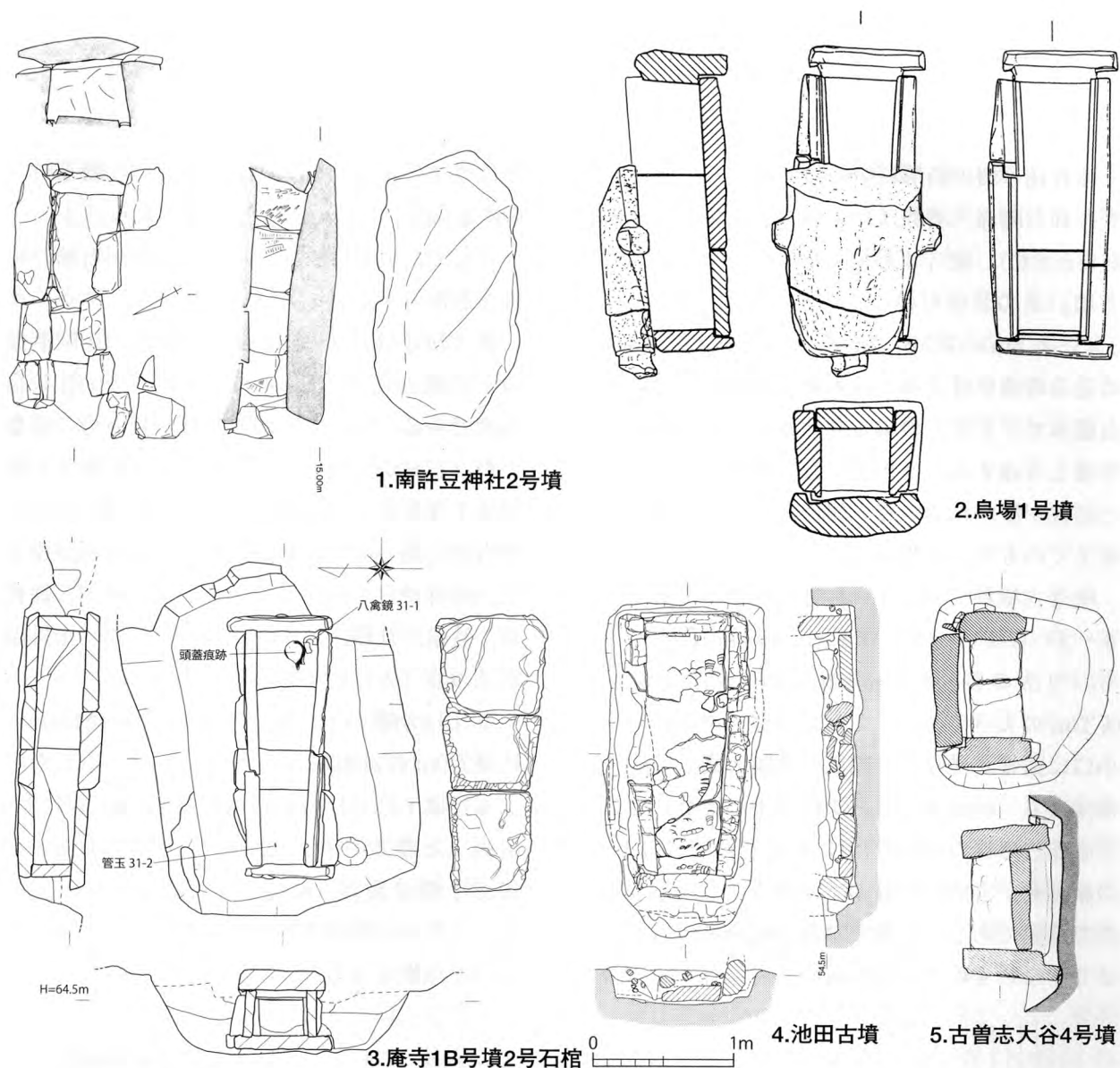


図9 箱形石棺の諸例 (1/50)

流域にある程度まとまるようである（山本1971，平田市誌編さん委1969）。

このうち左皿1号墳（出雲市国富町）は長頸鎌を含まないので中期後半より古いともみえるが、南許豆神社2号墳（円墳，出雲市小津町，図9-1）では長頸鎌でない鉄鎌に出雲3期の須恵器蓋杯がともなう（原1990）。

平野南部には、池田古墳（出雲市上塩冶町）がある（米田2001）。神戸川と斐伊川にはさまれた丘陵部の北端，標高約54mにある古墳（方墳か？）。箱形石棺（図9-4）は切石組みで，ガラス小玉・滑石臼玉，鏡片，鉄剣，U字形鋤・鍬先などが出土した。中期中頃の古墳であろう。

次に②小口石が側石を挟むという，板材の組み合わせ手法を見てみよう。

南許豆神社2号墳の箱形石棺は，小口板を側石の間に挟む組み合わせ（仮に「H形」とする）である。これに対し，池田古墳の場合は，幅の広い南東小口石は側石の内側に挟まれる「H形」だが，北西小口は「Ⅱ形」である。

切石組みで「Ⅱ形」の例として，烏場1号墳（松江市玉湯町）がある（図9-2，近藤1970）。だが，本例は蓋石が舟形石棺の形状をしており，四辺には縄掛け突起まで削り出している。西谷16号墳の箱形石棺とは違いが大きい。古曾志大谷4号墳（松江市古曾志町，図9-5）も切石組「Ⅱ形」の例だが，内法がごく小さい（足立・丹羽野1989）。周溝から出土した7世紀後半の須恵器から，終末期古墳の一例で，石棺は石室の小型化したものとみてよからう。

西谷16号墳の箱形石棺の類例として、最近調査された庵寺古墳群（大田市仁摩町）がある（大庭ほか2010）。庵寺4号墳は8.5×6mの小型の方墳。その2号石棺は、内法で長さ1.8m×幅0.45～0.6m×深さ0.57mあり、組み合わせに、はめ込みの溝を設ける点に差異はあるものの、切石組みで「Ⅱ形」の組み合わせという点は西谷16号墳と共通する。南東端に鼓形器台を加工した土器枕が置かれていた。報告書では「4世紀中頃までのもの」とする。

庵寺古墳群では、1-B号墳の2号石棺（図9-3）も切石組みで「Ⅱ形」の組み合わせである。内法の長さ1.95m×幅0.45～0.7m×深さ0.33mの大きさで、こちらには底石がある。東小口に頭骨が残り、中国製八禽鏡と碧玉製管玉（両面穿孔）が出土した。4世紀後半とされる。

庵寺古墳群の箱形石棺は、切石組みで「Ⅱ形」の組合せが古墳時代前期まで遡ることを示した点で重要である。出雲では類似例をあげることはいできないものの、切石状に石材を加工する手

法は奥才古墳群（松江市鹿島町（三宅ほか1985・赤澤ほか2002））に見出すことができる。

そして、奥才古墳群は16号墳の箱形石棺の特徴③を検討する対比資料を提供する。

奥才14号墳は直径約18mの円墳。墳丘中央の1号箱形石棺（図10）は、「H形」の組み合わせである。小口と長辺の石材は長方形ではないが、石材が一定の厚さになるよう両面とも切削加工されている。石棺の底には礫が敷かれる。棺内から鏡2面と碧玉製紡錘車、鉄刀子が出土し、棺外からも石材に接して素環頭鉄刀、鉄長剣、鉄槍、鉄鏃、鉄鉈などが出土した。棺外副葬品の並べ方は西谷16号墳と似る。

奥才14号墳の1号箱形石棺は、長径4.4m×短径2.9mの掘形に入れてあった。先述した庵寺4号墳1号石棺の掘形は長径3.1m×短径2.5m以上と推定され、いずれも大型である。西谷16号墳の長径2.8m×短径2.3mという掘形は、これら古墳時代前期の箱形石棺に共通するものと類推できる。

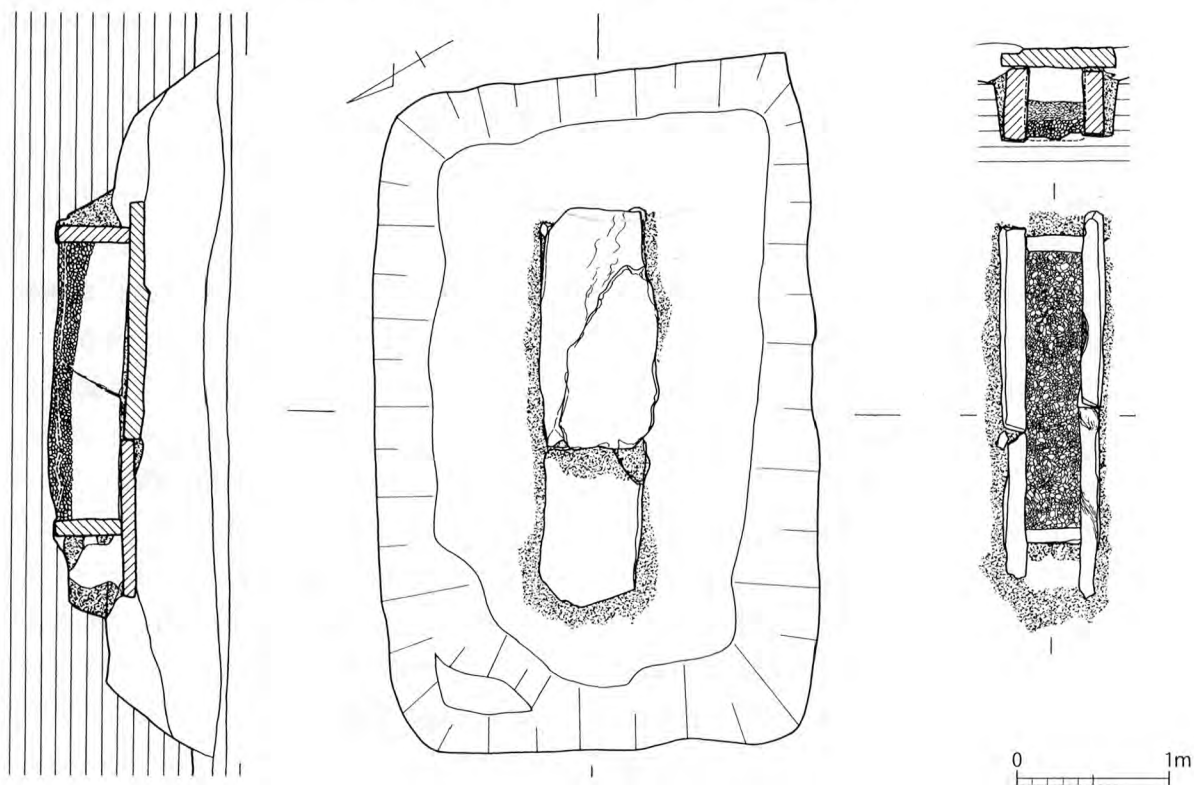


図10 奥才14号墳第1主体 (1/50)

副葬鉄器 西谷16号墳の短剣は、池淵俊一の分類によれば「ナデ角関a直茎c」である（池淵1993）。また、長剣は「直角関ナデ中細茎」にあたるが、「ナデ中細茎についてはほぼ浅直・斜角関とのみ相関する」（池淵1993 50頁）とあるので、直角関との組み合わせは例外的である。池淵は短剣の「直茎c」は関形態による年代差はないので「直茎cグループ」としてまとめ、「4世紀前半ではあまり認められず、4世紀後半から目立つようになり、5世紀中葉まで認められる。」（池淵1993, 49頁）とする。長剣については関形態との対応が通例とはことなるが、「ナデ中細茎」は「4世紀末～5世紀中葉の例が多」いとする（池淵1993, 50頁）。

西谷16号墳の副葬品で特徴的なのは、鉄製U字形鋤・鍬先と鉄製土掘り具（タビ）である。

U字形鋤・鍬先の出雲における類例は、出雲市池田古墳（米田2001）や松江市金崎1号墳（藤原ほか1978）がある。池田古墳は先述したように箱形石棺の形態にも共通点がある。池田古墳は須恵器をとまなわれないが、金崎1号墳の出土須恵器は、陶邑TK208型式・TK23型式の型式の特徴をもっている（田辺1981, 125頁）。

一方、16号墳の鉄製土掘り具（タビ）は、李東冠らの分類による「Ⅱc型式」に相当し、典型的な韓半島嶺南地域の形態を備える搬入品である。刃部先端近くに最大幅をもつ点で、馬山縣洞70号墳例など三国時代中期（ほぼ5世紀前後）のものと酷似する。李らによれば列島内でのタビの出土例は、西谷16号墳以外には京都府今林8号墳例しかないという（李ほか2008）。

まとめ このように、箱形石棺および副葬された鉄器を検討すると、西谷16号墳の築造時期は中期前半（5世紀前半）頃にあるとみられ、あるいは前期末にまで遡る可能性も残すであろう。

村上恭通と山村芳貴は、古墳時代の鉄製農工具の画期が前期後葉から中期前葉にあると考え

ている。16号墳のU字形鋤・鍬先のようなV字形をしたタイプは、韓半島の三韓時代後半期の弁韓・辰韓地域に特徴的とする（村上・山村2003）から、西谷16号墳の二つの農工具は、ともに韓半島の嶺南地域からの搬入品であって、まさに鉄製農工具の革新を示すものに他ならない。これは、吉備地域と比較しても遅れを感じさせない¹²。

7. おわりに

西谷墳墓群で発掘調査が行われた数少ない古墳（また同時に破壊された古墳でもあるが）、15号墳と16号墳を取り上げて、再検討を加えた。「よすみ」（四隅突出型墳丘墓）に比べれば、この遺跡を構成する古墳が言及されることは少ない。しかし、最も古いと考えられる西谷7号墳は長辺約25mの長方墳であり¹³、この規模は三角縁神獣鏡を出土した神原神社古墳（雲南市加茂町、29×25m）に著しくは劣らない¹⁴。

西谷墳墓群の古墳で7号墳に続くのは、前期末の21号墳（方墳）、中期の18号墳（方墳）と11号墳（円墳）である。

16号墳は11号墳に先行し、西谷墳墓群に造られた最初の円墳である可能性が高い。ここに半島製の農具が副葬されたわけだ。鉄製U字形鋤・鍬先は近傍では、池田古墳（出雲市上塩冶町）にもあり（米田2001）、ともに須恵器をとまなわれないから、金崎1号墳（松江市）での副葬に先行すると推定できる。ただ、この前後には舟形石棺などの新たな石棺型式が導入されるが、それは採用されてはいない。

西谷15号墳での須恵器副葬についても、出雲平野部では早期の例と確認した。このように古墳時代中期から後期初頭の西谷墳墓群の性格を推考するに、本稿で検討した2古墳はたいへん重要な位置を占めていると思う。今後も、西谷墳墓群全容の解明を進めたい。

註

¹ 西谷墳墓群の弥生墳墓および古墳についてこれまではすべて「西谷〇号墓」と呼ばれてきた。これは、1975年におこなわれた斐伊川放水路建設予定地内の分布調査成果の報告（西尾ほか1980）および出雲考古学会による踏査成果報告（出雲考古研1980）の呼称を踏襲したものである。前者の報告書で西谷墳墓群を記述した門脇俊彦は「なお、本稿で墳墓の語を用いたのは『西谷墳墓群』（出雲考古学会）に依ったもので他意があるわけではない。」（西尾ほか1980、80頁）としている。1980年頃は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器編年とともに、四隅突出型墳丘墓を「発生期の古墳」とみるのか弥生墳丘墓とみるのか、に関する議論が高まっていたものの、「墓」か「墳」かの問題は捨象されていた。もちろん、個別の墓の年代を決める資料が全くない状態であるから、致し方ないことではある。

その後、1983年から島根大学考古学研究室による測量調査および3号墓の発掘調査がおこなわれた。さらに1998年以降に出雲市がおこなった西谷墳墓群全域に対する測量調査および試掘調査により、個別の墓の年代はかなり判明したといってよい（渡辺ほか1992、坂本ほか2006）。

出雲弥生の森博物館の展示を企画する段階で、「弥生時代の墓＝墳丘墓（墳墓）」と「古墳時代の墓＝古墳」とを整理する必要が生れた。西谷墳墓群の墓だけを弥生時代であろうと古墳時代であろうと「〇号墓」と呼称するのは、見学者に無用の混乱をきたすと思われた。そこで調査成果をもとに次のように時代区分をおこなった。

「1～6号、9号、17号」は墳丘の特徴や出土土器から弥生時代の墳墓と判断できるので、これらは「1～6号墓、9号墓、17号墓」とする。「7号、10号、11号、14～16号、18～21号、25～27号」は古墳と確認された。また、「12号、13号、22～24号」は立地から判断して古墳と推測できる。よって、これらは「〇号墳」と呼称する。これに合わせて、従来「番外1号～5号」と呼ばれていた墳丘をもたない墓については、その埋葬施設の構造をとって「1号土壙墓、2号石棺墓、3号石棺墓、4号土壙墓、5号石棺墓」とする。

² 結局、報告書に記載された規模は、発掘調査前の所見にすぎないように思われる。

³ 発掘では表土（第1層）除去後に東溝を確認しているのに対して、西溝を検出するにあたっては不整形なトレンチを設定してさらに掘り下げをおこなってからこれを確認したのが不審だ。これは墳丘西斜

面で「第4層」とみなされた土層が、一部後世の堆積土だったからではないか。筆者は、第4層が「旧表土」、第5層は地山とみるほうがよい、と考えている。つまり、まず旧表土以下を方形に成形した。この時、東西の溝も掘られた。その後、第3層を盛土し、墓坑を掘って木棺を安置したのち、さらに第2層を盛った、と推測する。

なお、盛土の最上層とされる第2層は、墳丘の南北断面では墳丘北裾と想定した地山の傾斜変換点を越えてさらに北まで延びることになっている。これは理解に苦しむ。写真を見ると、第3層北端あたりで土層の違いを認めるので、その附近から北は別の層とすべきである。

⁴ 報告書に掲載された遺物は、「墓坑」の土師器甕と鉄刀子、西溝の須恵器と土師器である（報告書第9図）。このうち、西溝の土師器甕2点（報告書第9図5・6）は同一個体。東溝の土師器甕は図示されていないが、接合作業によって図化できたので、そのほかのものと合わせて掲出した。

⁵ 短剣と短剣の区別については、池淵俊一（池淵1993）にしたがい37cm前後を区分基準とした。

⁶ 斐伊川の旧河道（奈良時代の「出雲大川」）については、（山田・高安2006）などをもとに、現在の出雲市八島町・常松町・平野町・高岡町・荻野町あたりと考える。本書の高橋論文を参照のこと。

⁷ Ⅲ区加工段5出土土器の型式について、報告者の萩雅人は「松山編年の夫敷上層式（大谷編年出雲1期併行期）」とし、須恵器は「出雲2期（TK10併行期）」とする（萩・浅野2003 63～65頁）。また、池淵俊一はこれを松山Ⅲ期として須恵器の共伴を認めていない（池淵2008 298・299頁第199図）。須恵器の蓋杯身は、直径11.6cmしかなく「出雲1期」と考えるので、土師器・須恵器とも「松山Ⅳ期」としてよからう。

⁸ （山本1971）に「35 浅柄」と掲載された資料と推測される。記録が「山本資料」（島根県埋蔵文化財調査研究センター所蔵）にある。

⁹ なお「空間B」のうち「壁面の一部に小口積みの手法を用いるものなど」は「B'」としている。この型式の石棺については吉田学の論考（吉田2002）を参照。

¹⁰ 仲仙寺5号墳には須恵器の副葬がなく細身の中空金環と櫛があること、中ノ空古墳には櫛や鉄剣・尖根鉄鎌があること、左皿1号墳の須恵器は山本Ⅲ期でもⅡ期に近いこと、などがその根拠である。

これ以外の型式の時期について山本は、ⅠA：古墳発生期（四隅突出型墳丘墓の時期；筆者注）からみられ、古墳時代前期から中・後期初頭のころまでが

多く、後期中葉以降はまれである、ⅠB：おもに中期末から後期に行われたのであろう、ⅡB：中期末から後期であらう、としている（山本1971）。山陰の箱形石棺の盛行時期については、岩橋孝典も言及している（岩橋2007）。

それによると、弥生時代の伯耆・因幡（鳥取県下）には箱形石棺はない。石見では弥生時代後期中頃に順庵原1号墓（邑南町）がある。これは、安芸山間部との交流の結果という。また、出雲では弥生時代後期後葉に仲仙寺9号墓・10号墓（安来市荒島町）があるが、石見・出雲とも類例は少ない。これに対して古墳時代前期になると、山陰各地に出現する。

¹¹ 守岡正司は「底石の有無、掘形と石材の置き方の関連が視点となる」と指摘している（守岡1996）。

¹² 金田善敬によれば、岡山県地域では鉄製U字形鋤・鍬先は天狗山古墳（倉敷市真備町）など「中期後葉以後に出土数が増え」、それを装着した木製土木具は中期後半期の百間川原尾島遺跡に例がある

（金田2005）。

¹³ 報告書では7号墳を、溝で区画された基壇の上に東西約23m、南北約15m、高さ1mの「主墳」がのると考えている。だが、20カ所のトレンチ土層断面図に「盛土」とされた土層はこの「主墳」の範囲（125頁 図129）を越えて外側に広がっている。「盛土」の範囲を拾うと、東西約25m、南北約18m、高さ約2mの規模となる。

¹⁴ もちろん、大成古墳（一辺60m）や造山1号墳（60×50m、ともに安来市荒島町）とは較べるべくもないが、破鏡を副葬した小屋谷3号墳（19×15m、松江市八雲町）や古城山古墳（19×15m、八束郡東出雲町）、盤龍鏡を副葬した月廻番外3号墳（一辺23m、松江市）、三角縁神獣鏡を副葬した八日山1号墳（一辺23.5m、松江市新庄町）などとはほぼ同規模をそなえていることは、一応、留意しておいてよいと考える。

参考文献

- 赤澤秀則ほか 2002『奥才古墳群第8支群 県道御津東生馬線改良工事に伴う調査』島根県松江土木建築事務所・鹿島町教育委員会
- 足立克己・丹羽野裕 1989『古曾志遺跡群発掘調査報告書』一朝日ヶ丘団地造成工事に伴う発掘調査一、島根県教育委員会
- 出雲考古学研究会編 1980『古代の出雲を考える2 ―西谷墳墓群―』
- 池淵俊一 1993「鉄製武器に関する一考察 ―古墳時代前半期の刀剣類を中心として―」『古代文化研究』第1号、島根県古代文化センター、41～104頁
- 池淵俊一 2008「総括 第2節古墳時代中期前半の遺構・遺物に関する諸問題」『九景川遺跡』一般県道出雲インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ、島根県教育委員会、294～320頁
- 板垣旭・広江耕史・桑原真治 1989『夫敷遺跡』国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ、建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
- 今岡一三 2009『御崎谷遺跡・間谷東遺跡・浅柄北古墳・間谷西2遺跡・間谷西古墳群』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3、島根県教育委員会
- 今岡一三・梶田勝造 1999『三田谷Ⅰ遺跡 vol.1』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5、建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会
- 岩橋孝典 2007「山陰弥生墓制の検討と四隅突出型墳丘墓の特質」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
- 内田律雄ほか 2007『山持遺跡（Ⅳ区）Vol.3』国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ、島根県教育委員会
- 大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集、島根考古学会、39～82頁
- 大庭俊次ほか 2010『梨ノ木坂遺跡・庵寺古墳群・庵寺遺跡Ⅱ』一般国道9号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3、国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会
- 景山真二・曾田辰雄 2008『玉泉寺裏遺跡 浜井場4号墳 間谷東古墳』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査2、島根県教育委員会
- 勝部智明 2001『古志本郷遺跡Ⅱ』斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書11、国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所・島根県教育委員会
- 勝部智明ほか 2000『三田谷Ⅰ遺跡 Vol.2』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8、建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会

- 金田善敬 2005「岡山県における木製土木具の鉄器化」『待兼山考古学論集 一都出比呂志先生退任記念一』大阪大学考古学友の会, 199~208頁
- 川原和人ほか 2005『畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡・廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・樺ノ内Ⅰ遺跡』山陰自動車道鳥取益田線(宍道~出雲間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2, 日本道路公団中国支社・島根県教育委員会
- 金 在弘 2005「楽浪地域の鳳山養洞里5号磚室墓出土U字形鋤先」『考古学誌』第14輯, 韓国考古美術研究所, 59~85頁
- 久保田一郎ほか 2005『中野清水遺跡 2』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告6, 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会
- 近藤 正 1970『玉造烏坊遺跡群-古墳群・集落跡・古墓群の記録-』玉湯町教育委員会S
- 坂本豊治 2002『中野西遺跡』出雲市北部第二土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書, 出雲市教育委員会
- 坂本豊治ほか 2006『西谷墳墓群-平成14年~16年度発掘調査報告書』出雲市教育委員会。
- 坂本豊治ほか 2010『矢野遺跡』新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 出雲市の文化財報告10, 出雲市教育委員会
- 宍道年弘 1992『島根県斐川町遺跡分布調査報告書』斐川町文化財調査報告10, 斐川町教育委員会
- 杉原清一・大梶智徳 1997『ひろげ遺跡』主要地方道大社日御碕線中山工区特別県単(改良)工事に係わる発掘調査報告書, 大社町教育委員会
- 杉原清一ほか 1987『庭反Ⅱ遺跡・他 昭和61年度調査報告書』湖陵町教育委員会
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 鳥谷芳雄 2000『三田谷Ⅰ遺跡 Vol.3』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9, 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会
- 中川 寧ほか 2008『里方本郷遺跡・山持遺跡4(5区・7区)』国道431号道路改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6, 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会
- 西尾克己ほか 1980『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会
- 萩雅人・浅野哲 2003『長廻遺跡(vol.2)・権現山古墳』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書18, 国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所・島根県教育委員会
- 蓮岡法猫ほか 2002『神原神社古墳』加茂町教育委員会
- 原 俊二 1990『南許豆神社古墳群Ⅰ』平田市教育委員会
- 平田市誌編さん委員会 1969『平田市誌』平田市
- 藤原幸雄・足立千利・岡崎雄二郎 1978『史跡金崎古墳群』昭和52年度環境整備事業報告書, 松江市教育委員会
- 古瀬清秀 1998「農工具」『古墳時代の研究』8古墳Ⅱ 副葬品, 雄山閣出版, 71~91頁
- 松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相 一大東式の再検討一」『島根考古学会誌』第8集, 島根考古学会, 1~29頁
- 松山智弘 2000「小谷式再検討 一出雲平野における新資料から一」『島根考古学会誌』第17集, 島根考古学会, 99~130頁
- 三吉秀充 2010「矢野遺跡C区SD3042出土の初期須恵器について」『矢野遺跡 自然科学分析・考察編(第4分冊)』新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 出雲市教育委員会, 159~162頁
- 三宅博士ほか 1985『奥才古墳群』鹿島町教育委員会
- 村上恭通・山村芳貴 2003「農工具」『考古資料大観』第7巻 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品, 小学館, 265~271頁
- 守岡正司 1996「来待石を使った古墳」『宍道町歴史叢書』1, 宍道町教育委員会, 1~15頁
- 山田和芳・高安克己 2006「神門水海」の湖岸線復元-地形・地質コアによる検討-『出雲国風土記の研究Ⅲ 神門水海北辺の研究(資料編)』島根県古代文化センター調査研究報告書34, 島根県古代文化センター, 41~52頁
- 山本 清 1959「山陰地方村落古墳の様相」『島根大学論集(人文科学)』第9号, 島根大学

- 山本 清 1964「小規模古墳について」『島根大学論集（人文科学）』第13号，島根大学（『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会，1971年 に所収）
- 山本 清 1971「山陰の石棺についてⅣ」『山陰文化研究紀要』第11号，島根大学（『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会，1971年 に所収）
- 湯村 功ほか 1993『簸川南地区広域営農団地農道整備事業に伴う 西谷15・16号墓発掘調査報告書』出雲市教育委員会
- 吉田 学 2002「山陰東部の小竪穴式石室についての一考察—石棺系小竪穴式石室の構造を中心として—」『島根考古学会誌』第19号，島根考古学会，65～97頁
- 米田美江子 2001『池田古墳』一畑バス営業所用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，出雲市教育委員会
- 四方田三己ほか 1997『大倉Ⅳ遺跡・綿田原Ⅰ遺跡』（株）出雲空港カントリー倶楽部建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書，斐川町教育委員会
- 李東冠・保元良美・小嶋篤・武末純一 2008「弥生・古墳時代の日韓鉄製農具研究 —タビ・サルポを中心として—」『日・韓交流の考古学』嶺南考古学会・九州考古学会第8回合同考古学大会，117～132頁
- 渡辺貞幸ほか 1992「西谷墳墓群の調査（Ⅰ）」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学考古学研究室